（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　髙井寛

本論文は、ハイデガーの主著『存在と時間』を「実存哲学」という観点から統一的に解釈し、その哲学的・倫理学的な内実を明らかにしようとするものである。同書については実存主義という観点から、あるいは存在論の基礎づけという視点から解釈されてきた研究史上の経緯が存在するが、本論文ではハイデガーのこの主著が「実存するとはどのようなことか」をめぐる哲学的解明として一貫して解釈される。本論文はそれゆえ、読解の対象を『存在と時間』に限定し、また読解の方法は合理的な再構成を主軸とするものとなる。

第一部では、以上の本稿の解釈方針が『存在と時間』の思考に対して内在的なものであることを、同書の「巻頭言」ならびに「序文」の読解を通して明らかにする。そこで明らかとなることは、公刊された『存在と時間』（第一部第一編と第二編）をその一部に含むはずであった〈存在と時間〉というプロジェクトには「存在の意味への問いの仕上げ」という課題が割り当てられているが、これは、存在の問いに対する答えを探求する以前の、いわば準備作業を指しているという事情である。そうした準備作業の一部である刊本『存在と時間』の考察は、存在の問いを問うことができ、存在というものを理解することのできる私たち（現存在）が、それぞれの「私」を存在するとはどのようなことかを明らかにするという課題に向けられている。すなわち『存在と時間』は「実存するとはどのようなことか」についての哲学的解明であり、実存哲学の展開であることを企図されているのである。

本稿の第二部と第三部では、そのような解釈方針の下、実際に『存在と時間』がどのような哲学的洞察を示しているのかを明らかにする。第二部は、私たちの「日常的な在り方」を分析対象とした『存在と時間』第一部を中心的に読解する。そこで分析されるのは、私たち各人が、ある仕方で存在できるようになるという過程をつうじて個々の行為を導いている次第である。第三部では、私たちの「本来的な在りかた」を分析対象とする。本論文では、「本来的な在り方」が、具体的には、自分自身にとって重要な生の在り方について明示的に問い、語の優れた意味において責任主体となり、自己の人生の歴史を物語ることでアイデンティティを形成する経験をとおして理解され、そうした経験のそれぞれが詳細かつ具体的に考察されてゆく。

以上のように『存在と時間』の合理的な再構成をもくろむ本論文は、その分析の徹底性、読解の説得力、パラフレーズの巧みさにおいて、きわめて高い水準を示しており、先行研究の検討についても網羅的である。論述には、やや未整理で未展開な部分を残されているとはいえ、本論文が以後の研究の礎を築くものであることについては疑いを容れない。よって、本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位を授与するに相応しいものと判断する。